

富本秀和 とみもとひでかず

大学院医学系研究科教授、
医学部附属病院副院長(診療担当)
専門分野は、臨床神経学、脳卒中学、認知症、神経病理学

チームワークで 認知症の診断精度を上げる 画像診断技術を可能に。

厚生労働省の最新調査によれば、日本の認知症患者数は約462万人。予備群まで含めると800万人以上とされる。国をあげての対策が待たなしとなる中、三重県の認知症診断・治療技術の最前線に立つのが、三重大学大学院医学系研究科の富本秀和教授だ。最先端研究と診療の両面から認知症に立ち向かい、さらに地域のネットワークづくりなどを通じて三重の患者を見守っている。



三重大学の高度な医療設備、放射線科医や放射線技師との連携が、教授の研究の助けに。

神経系の不思議さにひかれて

愛知県常滑市で常滑焼の窯元の長男として生まれた、富本秀和教授。長男として家業を継ぐべきか迷ったのではないかと思いきや、「父からお前は商売には向いていない、と言われたんです」と笑う。商売人にはなれないが、もともと人と接することや人の役に立つことが好き。そんな自分の特性をいかして、医者になろうと決意したという。京都大学医学部へ進学後、専門分野の選択のきっかけとなったのが、父が脳梗塞で倒れたときだ。「幸い父は助かったんですが、自営業だったため母は忙しく、私と弟が病院で父に付き添っていたんですね。看病中、父の目が病変側に偏るような状態を見て、解剖学実習で学んだ神経系の不思議さが印象に残って」。神経系は、障害が起きた場所によって、どんな症状が出るかが厳密にコントロールされている。「複雑ですが非常に美しいシステムで、そこに興味を覚えたんです」とも語る。また、大学6年次、京都大学へ臨床神経学の大家と言われた教授が着任。「それこそハンマー1本で、患者さんの脳のどこに病変があるかを診

断される方で、自分もその域へ近づきたいと神経内科医の道へ進みました」。

脳血管障害と認知症の専門家へ
神経内科の疾患の中で、教授は脳血管障害と認知症を専門に研究を進めてきた。博士課程修了後、脳虚血の研究のためにアメリカのメイヨー・クリニックに留学。帰国後、京都大学では、iPS細胞(人工多能性幹細胞)を脳虚血の修復に利用する研究も手がけてきた。また、高血圧などで脳の細い血管が詰まる脳小血管病によってできる白質病変に注目。白質病変は認知症の原因とされ、欧米よりアジアの人々に多いとされる。そこで教授は、試行錯誤の末に白質病変を形成する動物モデルを開発した。それは現在、国内外で研究のために使われ、白質病変ができるメカニズムの解明に貢献している。

認知症の画像診断技術を確立
もう一つ、教授が目にしたのがアミロイド血管症という疾患だ。高血圧による脳小血管病と同じく細い血管に変化をきたすもので、

アミロイドというタンパク質がたまって微小出血や微小梗塞を起こす。アミロイド血管症があると、アルツハイマー病をともなうことが多く、早期に精度の高い診断ができれば、アルツハイマー病の早期治療にもつながる。そこで教授は、日本屈指の放射線診断技術を持つ三重大学に赴任後、アミロイド血管症をMRI画像でとらえる研究を開始。約2年の歳月をかけて、世界で初めて、不可能とされていたサイズの微小梗塞の病変の検出に成功した。「もともとあきらめの悪い方(笑)。途中、難しいかなと思った時期もあったんですが、放射線科の先生方にご協力いただき見つけることができました」。教授の粘り強さと、放射線科とのチームワークが大きな成果をもたらしたのだ。認知症には、アルツハイマー病や血管性認知症などの種類があるが、近年、両疾患が合併した混合型認知症が多いことがわかってきた。「MRIで高血圧による脳小血管病とアミロイド血管症を同時にチェックできるのは、認知症の有力な診断技術になる」と、教授は確信している。

ネットワークで患者をサポート

一方、神経内科は臨床と基礎が近く、臨床で観察した事柄を基礎で検証したり、基礎研究の成果を臨床の検査や治療に戻すことも難しい領域だ。そういったことも、教授が臨床と研究を同時に続けてきた原動力になっている。「最先端研究による診断技術を臨床現場に戻し、診断だけで認知症であることがわかるようにしたい。認知症は社会に大きな負荷を与える病気。誰もが気軽に受けられる診療体制をつくらなければ」と、教授は目標を語る。もちろん、最大の目標は認知症の根本治療だが、一筋縄にはいかない難題だ。そこで教授は今すぐできる対策として、地域の認知症患者をバックアップする「三重もの忘れネットワーク^(※1)」を構築。三重県全域に活動を拡大しつつある。活動の一つである事例相談会は、認知症患者の困難な事例を多職種で検討し介入する取り組みで、全国的にも高く評価されている。また、企業や教育学部との産学連携研究として、認知症患者へのカラオケによる音楽療法を実施するなど、教授を中心とする三重大学のチームは、あらゆる角度から認知

症の原因究明や治療にあたっている。

県全域の認知症治療をリード

こうした実績が評価され、昨年、三重大学医学部附属病院は、三重県から基幹型認知症疾患医療センター^(※2)に指定された。県全体で、認知症の治療の底上げを図ろうとするもので、その中心に教授はいる。「仕事づけになると発想や業務がいきづまるので、たまには温泉巡りや旅行にも」と、リラックス法を語る教授。その効用もあるのだろうか、研究に診療に教育と多忙を極めるはずなのに、その語り口はいつも優しい。「でもね、優しいだけじゃダメなんです。外来でのトークは押ししたり引いたり、なかなかスキルがいるんですよ」。人とのコミュニケーションが好きだと、医師という天職を選んだ教授。不安にかられる認知症患者とその家族にとって、教授の存在は大きな支えとなっている。

※1 三重もの忘れネットワーク
三重大学認知症医療学講座が中心となり、地域包括支援センターも参加して、医療や福祉、行政、司法までも含む認知症ケアの連携システムの整備を目指す組織。

※2 基幹型認知症疾患医療センター
認知症疾患の専門医療を提供するほか、医療や介護などの連携の拠点。



スウェーデンGothenburg大学で三重大学海外研修の学生たちと。



三重もの忘れネットワークによる事例相談会。



国際交流で訪れたガーナ大学、野口英世銅像の前で。